

教育社会学におけるウェーバー「理論」の動向

— 葛藤理論をこえるための方法論的基礎 —

森 重雄(東京大学大学院)

〔1〕ふつう「理論」というとき、論理整合性と経験妥当性が同時に求められるが、実際には力点の違いに応じてさまざまな意味がこめられる。一方には論理整合性の、他方には経験妥当性の重視を想定できるが、両者ともに共通したアポリアにゆきつくことがある。

(1) 論理整合性が重視される場合、「理論」は往々「経験」や「現実」の対極にあって、これらを語るにはあまりに「論理」的な形而上学を實質的には意味する。それでいてなお「錬金術的」に現実を語る手法に対しては、さまざまな批判が加えられよう。

(2) 経験妥当性が重視される場合。「理論を裏証する」ことが暗に「裏証されないものは理論ではない」ことをいうときの「理論」がこれにあたりよう。この場合、厳密に検証されるのは特称命題であるから、その「一般化」にまつわる争点が生じてくる。たとえば、

① 社会測定の際選択される指標の妥当性。「理論」は社会測定の妥当性を保証するが、指標化のための密観的規準を必ずしも用意するわけではない。操作化という技術もこの問題を根本的に解決するとはいえない。

② 評価の問題。統計的有意と社会学的または教育学的有意との関係は、コップの水量の判定にたとえられるように、必ずしも自動的なものではない。

これらの困難は観察可能な対象への議論の限定と命題の特称化とにより解決しうるかもしれない。しかしこのとき「理論」は、精密化されるほどリアリティを失う流儀で言語化された「常識」となりかねない。むしろこれ自体を非とする理由はどこにもないが。

〔2〕(2)における争点は「理論そのもの」よりも「理論の裏証」にかかわる技術的性格が強い点を確認しておこう。これによって社会調査法が無意味だとか、残余の1~5%をたてに奇をてらう形而上学が「本当の理論」だといったのではない。そうではなくて、論理整合性と経験妥当性のいずれを重視するにせよ、対象の画定と言語化との、実在と概念との関係にかかわる存在-認識論レヴェルの哲学的課題を「理論」はまぬがれないことを明らかにしておきたかったためである。

以下、私は古典理論、とくにウェーバーにからめてこの課題(の哲学的分析ではなく)の「処理」と、その教育社会学人の含意に関する考察を示そうと思う。

〔3〕哲学的課題を哲学的に分析することなく処理する恐らく唯一の方法は「エポケー」であろう。が、これは無際限に可能なものではない。エポケーは何らかの納得を必要とする。事実、ある操作的定義が哲学的課題をエポケーさせることもあれば、そうでない場合もある。このとき、エポケーはたとえば操作化という方法や技術にではなく、それを支える「問題構成の納得性」に依存することになる。これを方法論よりむしろ問題論がエポケー可能性にかかわる——こう表現しよう。

この観点から、「理論」への要請にいまひとつ諒解可能性を加えることができる。諒解しうる問題の存在。これにそった方法の論理的・経験的運用——これが「理論」には必要なのである。そしてこの諒解は、理論家の心理や時代の検討やではなく、まず第一に「理

論」が呈示する問題を対象とする（たとえば近代批評の方法）。この観点は古典理論に最もよくなじむ。古典理論は問題論の諒解可能性をして哲学的アポリアをエポケーさせるように言語化された世界解釈にほかならないからである。この点で古典理論はわれわれに問題の諒解過程そのものを用意してくれる。

〔4〕近年、古典の再評価がいわれ、とりわけマルクスとウェーバーのおのおのに立脚した「葛藤理論」が英語圏の教育社会学に登場した。ここではウェーバーについて論じよう。

(1) 権力をめぐり対立する地位集団・身分 (status group) 間の葛藤の様態が、当該社会の教育の特性をかたちづくる——これが単純化した葛藤理論である。しかし〔3〕の観点から、はたしてこの古典理論把握が適切なものかどうか。つまり、ウェーバーの問題論を葛藤理論とらえているかどうか。

(2) わざわざこういうのは、ウェーバーにとって集団間葛藤自体が問題ではなかったからである。彼は資本主義がなぜ近代西洋にのみ出現し、その本質はなにでゆくえはどうか、という問題論をもっていった。葛藤理論は歴史—比較的方法、理解的方法等とならんで、この問題論を諒解可能なかたちで展開するための方法論であった。つまり、資本主義をうんだ近代西洋に固有の集団間葛藤こそが重要なのであった。よって、葛藤理論をウェーバー「理論」として論じることは、方法論による問題論の窒息、諒解対象の疎隔をまねきかねない。これは葛藤理論が、少なくとも彼の問題論ほどにウェーバーに依拠する必要があるのかどうかを考えた場合、明らかであろう。

〔5〕古典理論の権威はわれわれを補強するのに役立つ。私の信念をウェーバーがいえばヨリ確からしくみえる。しかしわれわれはふつう理論家への帰依よりも——これまでの議論のすじでいえば——「理論」の諒解を志向

する（むしろ古典理論の体系的—貫性を過大に見積るべきではないが、諒解の対象は問題論にある）。そこで、先入観や方法に極力とらわれない現状把握が実証分析のための基礎研究であるならば、「理論」からとりだした方法論による教育分析とは別に、教育が問題論のうちでいかに位置づけられているかの検討が理論分析のための基礎研究となる。

さらにこのように、約言すれば古典の権威は定立された問題の諒解可能性=諒解レベルでの重要性にあるとするならば、理論研究もあなごち「机上の空論」とはいえなくなる。というのも、私個人は古典理論の多くは近代化理論として、その問題論に明示的・暗示的に教育の特殊近代的形式=教育システムに関する洞察を含むと考えるが、この種の把握は教育社会学において古典理論が（信念や方法の正当化というよりむしろ教育の近代化という）経験的議論と重なりあうことを可能とするからである。これはとりもなおさず、「理論と実証との分裂」のうえにならたつ形而上学的独善や、ある種の早急な「理論の実証」がもたらす純技術的な問題解釈^{**}のどちらでもない、あえていえば教育社会学的な問題構成の特定化・明確化をめざす（恐らくは形而上学よりの側からの）ひとつの提案である。

* 天野郁夫（東大）、菊池城司（阪大）両氏のいいまわしからヒントをえた。

** 第34回大会（於広島大学1982）要旨集録、7-8頁。

† なお、本報告は抽象的な方法論議を優先した。これに沿った具体的検討にはいまのところ「デュルケムとデュルケム以前」（東大教育学部紀要Vol. 21, 1982）および「ウェーバーの教育社会学」（教社研究叢集）がある。関心をもたれたかたがたから御批判をいただければ、さいわいである。